

学位論文要約

日本語の雑談における母語話者と上級学習者による
スタイルシフトの研究

—非デスマス形の指標的機能の観点から—

広島大学大学院 教育学研究科

文化教育開発専攻 日本語教育学分野

D125436 岡崎 渉

論文構成

第1章 序論

1.1 本研究の目的

1.2 本論文の構成

第2章 スタイルに関する先行研究

2.1 スタイル及びスタイルシフトの定義

2.1.1 スタイル

2.1.2 デスマス形と非デスマス形

2.1.3 スタイルシフト

2.2 スタイルへの理論的アプローチ

2.2.1 「ポライトネス理論」

2.2.2 「わきまえ」

2.2.3 「指標性」

2.2.4 本研究の立場

2.3 日本語母語話者のスタイル運用

2.3.1 シフトの生起環境と機能

2.3.2 インフォーマルスタイルとインパーソナルスタイル

2.3.3 独話的発話

2.3.4 問題の所在

2.4 日本語学習者のスタイル運用

2.4.1 JFL 学習者

2.4.2 日本滞在を経た JFL 学習者

2.4.3 JSL 学習者

2.4.4 問題の所在

2.5 研究課題

第3章 非デスマス形の分類基準の検討

3.1 データ

3.2 方法

3.2.1 スタイル及び非デスマス形の分類

3.2.2 分析

3.3 結果

3.3.1 裸の非デスマス形

3.3.2 補助動詞

3.3.3 終助詞

3.3.4 疑問詞

3.3.5 上昇音調

3.4 まとめと考察

第4章 日本語母語話者による非デスマス形へのスタイルシフト

4.1 データ

4.2 方法

4.2.1 スタイル及び非デスマス形の分類

4.2.2 分析

4.3 結果

4.3.1 各スタイルの使用頻度

4.3.2 インフォーマルスタイル

4.3.3 インパーソナルスタイル

4.3.4 独話的発話

4.4 まとめと考察

第5章 日本語学習者による非デスマス形へのスタイルシフト

5.1 データ

5.1.1 調査

参加者

5.1.2 手続き

5.2 方法

5.2.1 スタイル及び非デスマス形の分類

5.2.2 分析

5.3 結果

5.3.1 各スタイルの使用頻度

5.3.2 インフォーマルスタイル

5.3.3 インパーソナルスタイル

5.3.4 独話的発話

5.4 まとめと考察

第6章 総合考察

6.1 本研究のまとめ

6.2 母語話者のスタイル運用

6.3 学習者のスタイル運用

第7章 結論

7.1 研究課題への回答

7.2 日本語教育への提言

7.3 今後の課題

補助資料

会話例に用いた記号凡例

出典

参考文献

第1章 序論

1.1 本研究の目的

デスマス形・非デスマスというスタイルは、丁寧さや聞き手との心理的距離を表すとされている。一方で、「指標性 (indexicality)」(Silverstein, 1979) の観点を用いた研究においてスタイルは、そのような機能と直結するものではなく、話し手の行為や社会的アイデンティティ、聞き手との社会的関係、談話展開等に関するさまざまな意味の「指標」として機能するものであることが示されている (Cook, 2008 等)。しかし、指標性の観点を用いた研究による知見は、特定の制度的な文脈が調査対象とされる場合が多く、人々の日常的なやりとりへの一般化が難しい。加えて、非デスマス形は、終助詞や文末の上昇音調等、共起する要素によって指標される意味が異なっていくことが指摘されているが (Cook, 2002 等)、会話で用いられる非デスマス形にはさまざまなバリエーションがあり、それらがどのように区別されるのか、また、区別された非デスマス形はそれぞれどのような機能を果たすのか、明らかでない。日本語学習者のスタイル運用についての研究も多くなされているが、大半はスタイルを待遇表現としてのみ捉えており、そもそも非デスマス形がどのような機能を果たすのかという点を踏まえた使用実態は明らかでない。

そこで本研究では、「指標性」の観点から、さまざまなバリエーションのある非デスマス形の分類方法を検討し、初対面の日本語母語話者同士による雑談における非デスマス形へのシフトを通して、その機能を検討する。この結果を踏まえ、初対面の母語話者との雑談における、学習者の非デスマス形へのシフトの使用実態を記述する。

1.2 本論文の構成

全7章で構成されている。第3章で、非デスマス形に混在する異なるタイプの分類方法を検討した上で、第4章では母語話者、第5章では学習者を対象に、デスマス形主体の会話においてシフトされる非デスマス形の機能及び特徴を検討した。第6章では、母語話者及び学習者による非デスマス形使用の特徴について考察を行った。第7章では、本研究で得られた知見をまとめ、日本語教育のスタイル指導に対する提言、及び今後の課題を述べた。

第2章 スタイルに関する先行研究

2.1 スタイル及びスタイルシフトの定義

先行研究では「スピーチレベル」としたものも多いが、本研究では中立的な表現である「スタイル」を用いた。「デスマス形／非デスマス形」は、「敬体／常体」「丁寧形

(丁寧体) / 普通形 (普通体)」「デスマス体 / ダ・デアル体」とも呼ばれるが、本研究では、純粹に形態のみを指す「デスマス形 / 非デスマス形」を用いた。本研究での「シフト」は、当該談話において同一話者に主に用いられているスタイルとは異なるスタイルが用いられることを指すものとした。

2.2 スタイルへの理論的アプローチ

シフトを説明する理論に「ポライトネス理論」(Brown & Levinson, 1987)、「わかまえ」(Hill et al., 1986 等)があるが、いずれもスタイルが待遇表現として見なされている。スタイルを「指標性」(Silverstein, 1979)の観点から捉えた研究では、スタイルが丁寧さや待遇性と直接結びつかない事例が数多く示されている (Cook, 2008 等)。「指標性」は、従来の言語研究が主に分析対象としていた指示的な意味ではなく、文脈との協働により逐一生じ得る「非指示的」な意味、即ち、話し手の発話態度や参与役割、聞き手との社会的関係、場面に対する認識といった、文の命題情報に關与しないメタメッセージに着目するものである。個別の文脈に即した分析を行う指標性の観点は、スタイル運用により果たされる多様な機能を記述することができる。しかし、一連の研究ではデータに制度的会話を用いられる場合が多く、観察された諸特徴は制度的な文脈に依存したものであるだけに、人々が日常的に行っているやりとりへの一般化が難しいという問題もある。

2.3 日本語母語話者のスタイル運用

シフトが起こりやすい発話環境は先行研究で報告されているが、その場合、どのようなタイプの非デスマス形発話であっても該当するのか、或いは特定のタイプに限られるのか、また、非デスマス形は待遇表現以外の機能的側面も考慮したとき、一つのカテゴリーとして扱えるのかどうか不明である。Cook (2002) は、「指標性」(Silverstein, 1976)の観点から検討を行い、非デスマス形はインフォーマルスタイル (IF) と、インパーソナルスタイル (IP) に分けられることを指摘した。だが、特に IP の機能については、制度的会話における調査がいくつかあるのみであり、日常会話でも同様の機能が果たされるのかどうか、他にどのような機能があるのか、調査が進められていない。また、非デスマス形には独話的発話も含まれるが、IF・IP いずれの特徴にも合致しない。会話における独話的発話に焦点を当てた研究はほとんどなく、その機能を検討する余地がある。そのためにはまず、IF・IP・独話的発話をどう区別するのかを明確にする必要がある。

2.4 日本語学習者のスタイル運用

学習者を対象とした多くの研究も、母語話者と同様に、スタイルを待遇表現として

見なしている。学習者の非デスマス形は形式や発話環境によって分類される場合が多く、学習者が非デスマス形に混在する各タイプをどの程度区別しているのか、その機能を活用しているのかという点は不明である。IF・IP・独話的発話の区別を始めとする指標的機能の観点から、学習者のスタイル運用を見たとき、JSL 学習者は、非デスマス形を母語話者同様に用いているのかどうか、検討する必要がある。

2.5 研究課題

- (1) 非デスマス形は、どのように IF・IP・独話的発話に分類可能か【第3章】
- (2) デスマス形主体の雑談において、母語話者にシフトされる非デスマス形はどのような機能を果たしているか【第4章】
- (3) デスマス形主体の雑談において、JSL 上級学習者にシフトされる非デスマス形はどのような特徴をもつか【第5章】

第3章 非デスマス形の分類基準の検討

3.1 データ

IF・IP・独話的発話を分類する上での判断の拠り所とするために、データには非デスマス形主体の会話（以下、非デスマス形会話）（約 160 分）と、IF の使用が控えられであろうデスマス形主体の会話（以下、デスマス形会話）（約 290 分）を用いた。

3.2 方法

本研究では、スタイルを認定する単位を「発話文」とし、その認定方法は基本的に宇佐美（2007）に従った。すべての非デスマス形発話に対し、IF・IP・独話的発話というタイプの分類を試みたところ、Cook（2002）の挙げた裸の非デスマス形、終助詞、発話末の上昇音調に加え、補助動詞、疑問文における疑問詞もタイプの区別に関与することがわかった。それぞれの要素が、非デスマス形にどの程度用いられているかを調べ、分類上問題になり得るパターンを抽出した。

3.3 結果

非デスマス形を、裸の非デスマス形、補助動詞、終助詞、疑問詞、上昇音調という観点から、それぞれの用いられた非デスマス形が、どのような場合に IF・IP・独話的発話のどれに分類されるのかを検討した。

3.4 まとめと考察

多くの先行研究でスタイルは待遇表現として扱われており、その他の機能的側面を

考慮した上でどのような分類が妥当か検討されていなかった。本章では、分類の観点として Cook (2002) の挙げる裸の非デスマス形、終助詞、上昇音調に、補助動詞と疑問詞も加えた上で、各要素の用いられた非デスマス形が、どのような場合に IF・IP・独話的発話それぞれに分類されるのかを検討し、その分類基準を作成した。

第4章 日本語母語話者による非デスマス形へのスタイルシフト

4.1 データ

データには、第3章でも用いた、デスマス形主体の11組(約260分)による初対面二者間の雑談会話を用いた。

4.2 方法

使用数の少ない IF を除き、IP・独話的発話がどのように下位分類できるかを検討した結果、IP は主に、「繰り返し」「共同発話」「確認要求」「背景情報の提示」「意見・感覚・経験等の述べ立て」という5つの発話環境で、独話的発話は主に、「感情表出」「思い出し」「気づき」という3つの発話環境で用いられていることがわかった。IP・独話的発話の分類作業を行うにあたっては、発話環境別の分類基準を作成し、二者間で分類結果の高い一致率を得ることで信頼性を確保した。そして、発話環境別に IP・独話的発話それぞれの機能を検討した。

4.3 結果

シフトされた非デスマス形のうち、IF の使用はすべての発話の内 0.7%と、使用が控えられていた。IP・独話的発話は、雑談においても、どのような連鎖上の位置で用いられるかによって、相手に対する親しみや共感を表示することも、相手へのフェイス侵害を緩和することもできることが確認された。また、特に「繰り返し」「確認要求」「背景情報の提示」は IP であることによって、聞き手が語りを行う機会の提供は行えど、どのような展開を行うかに主導的には関わらない態度が示されていることが示唆された。独話的発話の使用は主に、「感情表出」「思い出し」「気づき」という発話環境で観察された。独話的発話は「話題の境界」で用いられることで、話題の機会を提供する手段として利用されていることがわかった。

4.4 まとめと考察

本章では、先行研究で示されてきたシフトの起こりやすい発話環境は、IP・独話的発話の用いられやすい発話環境であることがわかった。IP・独話的発話の機能としては、次のターンを極力制約せず、話題の機会を提供することで、談話を非主導的に進

める手段として利用可能であることが示された。独話的発話の場合、デスマス形会話において高頻度で用いられるのは、話題管理上の必要性という側面も大きいと思われる。情意的機能としては、従来、シフトの機能として見なされがちであった、聞き手への親しみの表示や心理的距離の短縮といった機能は、非デスマス形へのシフトによってのみ生じるものではなく、IP・独話的発話の使用によっても果たされるものであることが示された。これは、発話が置かれる連鎖上の位置や、発話内容、各種モダリティ要素との共起によって可能となるものである。

第5章 日本語学習者による非デスマス形へのスタイルシフト

5.1 データ

接触場面会話は、母語場面会話と同じ条件である、同年代の者同士による初対面の雑談をデータに用いた。調査に参加した学習者は、日本在住の上級学習者 15 名であった。日本滞在歴と母語については、幅広く JSL 上級学習者に共通する特徴を探るため問わなかった。日本語母語話者には 11 名の協力を得た。会話データ計 15 本を採集した。平均会話時間は約 19 分であったが、分析では 15 分までの部分のみを使用した。

5.2 方法

機能面からその使用実態を記述するため、母語場面会話と同様に、スタイル及び非デスマス形の分類を行った。IF はそのパターンを検討し、IP と独話的発話は、第 3 章で用いたものと同じ発話環境に分類した。分類に当たっては、筆者を含めた二者間で分類作業を行った結果、高い一致率が確保されたため、基準の信頼性に問題はないと判断した。

5.3 結果

各スタイルの使用率を算出した結果、非デスマス形のほうが多かった 3 組のペアは分析から除外した。母語場面の母語話者も加え、非デスマス形の各タイプの使用率を算出したところ、学習者の非デスマス形の使用率は両場面の母語話者とさして差はないものの、IF を多く用いている者もあり、独話的発話の使用率は両場面の母語話者より低かった。IF のパターンとして、(1)質問に対する簡潔な応答や名詞で終わる応答、(2)「感情表出」における終助詞「ね／よ」の使用、(3)「思い出し」、或いは助けを求めるときにおける独話的発話のマーカの不自然な使用ないし不使用が観察された。IP について、学習者は母語話者に比べ、聞き手に語りの機会を提供する用法に乏しいこと、「背景情報の提示」「意見等の述べ立て」には、名詞で終わられる発話が多いという形式面での特徴が見られた。学習者の IP は使用率で見れば母語話者とさして差はな

いが、機能面、形式面から見ると、主体的に用いているとは言い難い。独話的発話について、学習者はどの発話環境での使用率も母語話者より低く、特に「気づき」の使用はほぼ皆無であった。この結果は、デスマス形でも用いられる戦略としての情意的態度の表出を活用していない学習者が多いことを意味する。また、母語話者は頻用していた話題の機会を提供する独話的発話は皆無であった。

5.4 まとめと考察

学習者の IF に見られたパターンは、JSL 上級学習者にも依然として生じやすい問題であることがわかった。原因として、簡潔な応答や名詞で終わられる発話が非デスマス形として認識されていないこと、独話的発話として聞かれるための特徴をうまく用いておらず、意図せず IF となっていることが考えられる。IP は名詞で終わられる発話が多く、活用変化が必要な動詞の終止形で終わられる発話の使用率が低かったことから、学習者は全体的に IP を主体的に用いているとは言えない。独話的発話について本研究では、日本滞在歴の長い学習者であっても十分に使いこなせてはいない実態が新たに示された。これには「ね／よ」や「かな／つけ／か」といった終助詞を適切に用いていないことが関わっている。また、IP・独話的発話による話題の機会の提供には乏しかった。

第6章 総合考察

6.1 本研究のまとめ

第3章では、雑談における非デスマス形が、どのように IF・IP・独話的発話という異なるタイプに分類されるのかを検討し、その分類基準を作成した。

第4章では、雑談における非デスマス形の情意的機能は、指標としての非デスマス形が、種々の形態的、文脈的特徴との協働によって果たされるものであること、IP と独話的発話は、次のターンを極力制約せず話題の機会を提供するという点で、談話を非主導的に進める手段として利用されていることがわかった。

第5章では、学習者による非デスマス形の使用実態を検討した。IF は意図せず用いられる場合の多いことが示唆された。IP については、話題の機会を提供する手段としては用いられない傾向のあること、全体的に名詞で終わられる発話が多く、主体的に IP を活用しているとは言えないことがわかった。独話的発話については、使用が軒並み少なく、情意的機能、話題の機会の提供といった機能は活用されていないことがわかった。

6.2 母語話者のスタイル運用

本研究では、指標性の観点からなされた多くの研究が示しているように、丁寧さや待遇性の表示はスタイルの果たす機能の一側面に過ぎないことを確認した。シフトの動機として、次のターンに対する制約を緩め聞き手に語りの機会のみを提供すること、聞き手に宛てない方法をとることで、フェイス侵害を抑制することが挙げられた。IP・独話的発話は、その都度やりとりを円滑に進める上で取られ得る手段の内の一つである。このような特徴は、非デスマス形という形式と、意味・機能の直接の結びつきを前提とすることなく、発話が特定の文脈に置かれることで、さまざまな社会的意味を新たに生じさせる指標と捉えることで見出されたものである。本研究は、スタイル研究としてのみならず、一連の言語的指標研究としても位置づけられる。

6.3 学習者のスタイル運用

学習者の非デスマス形について考察を行う。まず、学習者のIFと独話的発話の使用には、「ね／よ」の使用、「かな／っけ」の不使用が関わっているものが多く見られたことから、終助詞の習得がスタイルの自然・適切な運用にも関わっていることが示された。また、学習者は非デスマス形という自覚がなく行う発話が多く、それが結果として自然なシフトとして機能する場合もあるが、発話する連鎖上の位置によっては、IFとして聞かれ、失礼な印象を与えてしまうおそれがある。そして、学習者がIP・独話的発話による話題の機会の提供を活用していなかったことには、接触場面における母語話者と学習者の役割関係が関わっていると思われる。よって、スタイル運用は、「どのように言うか」というだけの問題ではなく、そもそも特定の連鎖上の位置で「何を言うか」という問題が関わっていると考えられる。

第7章 結論

7.1 研究課題への回答

- (1) 非デスマス形にはIF・IPだけでなく、独話的発話も異なるタイプであることを指摘し、デスマス形主体の雑談をデータに用い、これらの分類基準を作成した。
- (2) 雑談においてシフトによる情意的機能は、連鎖上の位置、発話内容、モダリティ要素と共起することでも果たされること、IP・独話的発話は、談話展開を非主導的に進める手段として利用されていることがわかった。
- (3) 非デスマス形を明確な基準に従ってIF・IP・独話的発話というタイプに分類し、検討したところ、学習者はJSL上級者であっても、非デスマス形を機能的には母語話者のようには使いこなしていないことがわかった。

7.2 日本語教育への提言

学習者がスタイルシフトを学ぶことは、自他の用いるスタイルがどのような社会的意味を指標するかを的確に理解することにつながる。また、学習の早い段階からスタイルの区別を認識させることは、日本語運用において理解が不可欠である「待遇」への意識をもたせること、デスマス形の社会的意味を理解することに貢献しよう。スタイル指導の際には、終助詞の聞き手目当て性、そして会話においてどのような発話が非デスマス形となるのか、といった点も考慮したい。

7.3 今後の課題

- (1) 多様なデータの検討を重ね、IF・IP・独話的発話の分類基準の妥当性を高める。
- (2) 学習者によるデータをさらに収集し、且つ、非デスマス形の特徴を、機能と形式、両面から捉えることでより精緻化する。
- (3) デスマス形発話、中途終了発話も含めた、スタイルの指標的機能を検討する。

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書
- Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Cook, H. M. (2002). The social meanings of the Japanese plain form. In: Akatsuka, N. & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/ Korean Linguistics* (Vol. 10), pp. 150-163. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Cook, H. M. (2008). *Socializing Identities through Speech Style: Learners of Japanese as a foreign language*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Hill, B., Ide, S., Ikuta, S., Kawasaki, A. & Ogino, T. (1986). Universals of linguistic politeness: Quantitative evidence from Japanese and American English. *Journal of Pragmatics*, 10(3), 347-371.
- Silverstein, M. (1976). Shifters, linguistic categories, and cultural description. In: Basso, K. & Selby, H. (Eds.), *Meaning in Anthropology*, pp. 11-55. Albuquerque, NM: University of New Mexico Press.